日本文学研究論文集成 45

大江健三郎

島村 輝 編

監修
藤井貞和
久保田 淳
谷脇理史
竹盛天雄

若草書房

日本文学研究論文集成 45

大江健三郎

編者　島村　輝

1998 年 3 月 26 日　発行

発行所 若草書房 〒101−0064 東京都千代田区猿楽町 2−2−5 興新ビル
電話 03−5281−0366　FAX 03−5281−0369
発行者　根本治久
組版所　まんぼう社
印刷所　平河工業社
製本所　矢嶋製本

© 1998 若草書房
ISBN4−948755−24−9 C3395
落丁・乱丁はお取替えいたします

日本文学研究論文集成 45

大江健三郎

島村輝 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

若草書房

監修

藤井貞和

久保田　淳

谷脇理史

竹盛天雄

編集委員

多田一臣

室城秀之

佐伯真一

長島弘明

中島国彦

関谷一郎

紅野謙介

大橋毅彦

目次

ネイティヴとエイリアン・汝と我——大江健三郎の神話・近代・虚構　ノーマ・フィールド　7
歴史と思考の文脈と作家——大江健三郎の話相手——　マサオ・ミヨシ　22
天皇制——デモクラノト大江健三郎の決意　黒古一夫　30
森の谷間の「歌のカケハシ」
——大江健三郎「もうひとり和泉式部か生れた日」をめくって——　島村　輝　44
メタヒストリーとしての小説　大江健三郎『懐かしい年への手紙』　小森陽一　58
方法としての引用——『懐かしい年への手紙』はいかに構築されているか——　杉里直人　88
方法としての「記憶」——一九六五年前後の大江健三郎　成田龍一　113
蜜三郎の言葉と眼——「万延元年のフノトボール」に関する一視角——　桒原丈和　138
シェルターから癒しの塔へ——大江健三郎の新しい明るさ　川本三郎　154
大江文学の源泉＝顕現（エピファニー）経験とは何たったのか　門脇佳吉　167
魂と暗喩・小説家の回心について——大江健三郎論——　芳川泰久　180
地上への回帰——女性のヴィジョン　柴田勝二　206
大江健三郎のディケンズ——『キルプの軍団』をめくって——　松村昌家　227
大江健三郎における子規　一條孝夫　241
解説　259
文献一覧　277

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日本文学研究論文集成 45

大江健三郎

ネイティヴとエイリアン・汝と我

――大江健三郎の神話・近代・虚構

ノーマ・フィールド
島弘之 訳

1

「他者の発見」を考えるに際してツヴェンタン・トトロフは、「アメリカの発見と征服」を起点にしたことについて次のように語っている。

アメリカあるいはアメリカ人の発見か私たちの歴史の有する最も驚くべき出会いであったということは確かである。他の大陸や他の民族の「発見」については、私たちはそれと同じような根本的な差異性を感じていない。つまり、ヨーロッパ人は、アフリカやインドや中国の存在について全く無知であったことは決してなかったからである

我々は「発見」という行為、そしてそれを可能にする概念に潜む不遜さに気づき、驚きを感じるべきであろう。「発見」かいともたやすく「征服」と結ひつくのは決して偶然ではないはずである。というのも、「発見」の行為はとかく「創造」という英雄的行為と重なる。自然科

学の場合はともかく（いや、自然科学の場合でもそうであるはずだが）、「発見」の対象が他民族やその土地であることは際立って厄介にならざるをえない。なぜなら、発見者は発見されたものを同類として受け止めがたいからである。

とかく「発見」の概念につきものなのは、「起源」に対する執着であろう。またアメリカに即していうと、マイラ・ジェーレンがその挑発的著書、『アメリカの受肉――個人・国家・大陸』のなかで「アメリカ研究、つまりアメリカ的性格やエトス、アメリカの文化や独特の美意識の研究は、圧倒的に起源の研究であった」と述べている。なぜそれがほぼ必然的であったかというと、ペリー・ミラーの言葉が示唆的である。ミラーは言う、アメリカの物語は「アメリカの空白の原始林へのヨーロッパ文化の移入」の物語である、と。ここで使われている vacant wilderness という表現の無邪気であるが故に偽善的な矛盾は見逃せない。

さて、たとえ「アフリカやインドや中国」が西洋にとって未知の「発見」の対象ではなかったにせよ、それ自体西洋の植民地勢力や布教活動に対する歯止めとはならなかった。アメリカの開拓者たちが大陸の原始林を空白とみなしたように、アフリカ、インド、中国の宣教師はそれぞれの土地で見過ごすことのできない伝統文明のさまざまな象徴の前で気後れはしなかったようである。これらの地域は西洋にとって同時に未知でもあり既知でもあったのであろう。『想像的地理とその表現――東洋人（オリエンタル）をオリエンタル化する』のなかでエドワード・サイードはこの状態をよく表現している。オリエント（『オリエンタリズム』では主に中東を指す）とは、

> 精神の地理の中で、エデンか楽園のように人が回帰して〈旧世界〉の新版を打ち立てるべき所という性格と、コロンブスがアメリカに行ったように〈新世界〉を打ち立てるために人が訪れる全く新しい場所であることの間

を揺れ動いてきたのである。このように考えると「発見」は常に反復、つまり再発見の可能性を有しており、その都度征服、あるいは支配と起源的発想という先にみた要素が付随してくるようである。発見→征服→起源の発想が求める最適の対象は、土地という幻想的物体――つまり、自然をも人間をも融合し内包したものである。これ

はまさに神話構造の根幹をなすのであるが、それには後に触れることにして、差当り「発見」の言説の中での主客の振り当てに注意しておきたい。

実は、地理と文法は結託しがちなのである。西洋の他者とは経済的に搾取されるか、軍事的に支配されるか、そこまでいかなくとも、自己文明からの解放感を味わうために訪れられる場所（エキゾチシズム現象）となり、能動的動詞の目的語（オブジェクト）であり、受動的動詞の主語（サブジェクト）という仕組みになっている。この種の問題に敏感なフレドリック・ジェイムスンですら最近の文章で盛んに躊躇はしながらも第一・第二・第三世界という範疇を採用し、第一と第二世界は主な生産様式により定義付け、第三世界となると「植民地主義と帝国主義の経験を味わわされた他の一連の国々」と定義付けているのも象徴的である。これに照らし合わせると、日本語で都合よく鏡像をなしている〈原始〉と〈始源〉がともに第一世界的発想だということが良くわかる。前者は第三世界を物質的または心理的に己れの優位性を示す道具としてとらえた場合、後者は歴史を超越する不可思議かつ尊い過去としてとらえた場合に引っ張りだされるのである。

とすると、発見・征服・始源譚（神話）創造のセットは、立場を変えれば、神＝王の渡来・服従・始源譚伝承と読み変えられるはずである。いずれにせよ、神話創造には、異質のモノが欠かせないようである。征服者にとってこれは先程の土地とその土着民であり、被征服者にしてみれば、外来王としての征服者である。もちろん征服の達成という前提抜きにはこのシナリオは成立しない。被征服者が神話伝承に参加するということは、自らの被征服を寿ぐことに他ならない。神話はすべて異質要素の支配過程を物語る（隠蔽する）といってしまえなくもない。しかし、それはあまりにも短絡的で、例えば、神話で無意識を考えるフロイトとイデオロギーとしてとらえざるをえないマルクスの境目がみえなくなるばかりか、神話が支配（人間による自然支配をも含む）に対する抵抗の道具としての可能性をも予め踏み躙ってしまうことになるので、その一歩前でやめておこう。

トドロフ、サイード、ジェイムスンの言葉を借りての問題提起はすべて西洋から非西洋をみてなされたものであるが、日本列島に身をおいてみると話はどうなるであろうか。他者との大規模な関わり合いであった第二次世界大戦の終決からそろそろ半世紀も経とうとしている今

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日、嘗ての大東亜共栄圏よりもはるかに有効な経済帝国が成立している。その間、ソウルオリンピックにより相対化された東京オリンピックや高度成長を経てシルクロードと数々の副産物が生みだされ、また少し前に物議を醸した東南アジアへの買春ツアーというアジアとの付き合い方もなされてきた……。

アジアの一員であるかないかというアンビヴァレンスは日本の西洋イメージ化にも反映されている。西洋人とその食生活、衣服、インテリアなどに長く憧憬の眼差しが注がれた結果であろうか、今はまさにNo.1であるジャパンは西洋として作り替えられている、いやむしろ西洋が日本として作りなおされたかのように見受けられる。国土の自然が破壊されるにつれて従来のスイス的自然のイメージがますます氾濫するのは容易に理解される。地揚げのためマイ・ホームの夢が冷たく醒めていく首都圏のサラリーマンではあるが日本企業はマンハッタンの最良不動産をつぎつぎと買い上げていく。そうして、相変わらず横文字は意味を離れて無邪気に巷をひとり歩きしている。

今まで嘗てない自信に満ち溢れた時代でありながら（であるからこそ?）白人願望（タシヤ）が働いていることを一寸肯定的に考えてみたい。英語の需要性はさることながら、その需要性だけでは説明しきれない英会話熱には何か別の可能性に対する期待、つまりalter ego（ベツノ ジコ）、しかも単に衣食住の面で表現されるのではなく、例えば日本人らしくない仕草が身に付く自己に対する幻想を意味しているのではなかろうか。そして英語の習得が異様なまでに社会的に奨励されている限り、これはいわば無作為的ではあるが唯一正当化された脱日本志向ともいえる。むろん外国語をしゃべることの恐ろしさもこれに由来しているのではあるが。なぜ今更、二、三十年前すでに陳腐であった現象を敢えて引き合いに出すかというと、一にはその間の世界情勢とそれにおける日本の立場の実に目覚ましい変化にも拘わらずこの一種の共同幻想が働き続けていることを確認したいのと、二には、今日吹聴されている国際化たるものが海外での効用はともかくその一副作用として、無意識といってもいい脱日本志向を方向付けるのではないかと懸念されるからである。とすれば、国際化とはナショナルで個別的なものにインターナショナルで普遍的な装いを施すことに他ならず、その装いは巧みに内外双方で機能している。つまるところ、他者的要素——それも日本に内在するものを含めて——を当然中心

におくべき国際化は逆にイデオロギーとしてそれを抹殺してしまうのである。

2

こういう時期に久しぶりに大江健三郎の作品と付き合ってみると実に新鮮な緊張感を覚える。ここでは初期の『飼育』と昨年発表された『懐かしい年への手紙』を中心に神話構造が今日の虚構（フィクション）にとってどのような危険とともに可能性を胎んでいるかを考えてみたいのだが、先ず大江文学の神話的要素を確認しておこう。大江の作品は一貫して異質性に富んでいて、しかも一般に日本では憧れの的にならない異人たち、つまり朝鮮人、（ファッション化される前の）アメリカ黒人、ユダヤ人というような文字通りの外国人、あるいは変質者（パーヴァート）や奇形児などが主流をなしている。大江のヒーローが日本脱出を夢見る時、行く先は例えばアフリカである。彼らはスワヒリ語を学び、アフリカの地図を秘蔵している。また別のレヴェルではサルトルを通してのジュネ、メイラー、〔ソウル〕ベロウ、そして『ハックルベリーフィン』のマーク・トウェインといった作家を好んできた大江は、グロテスクというより、むしろおぞましいイメージを独特な言語で表現してきた。シチュウにする前の牛の尾、輝きに満ちて開花する癌細胞、肛門にキュウリをつっこみ朱色に塗られ吊された肉体などを白熱した文章で描く異様な感性を育てあげたばかりか、それと一見矛盾する極めて抽象化された言語を磨き上げてきた。これが大江の日本語らしからぬ日本語であることは、逆に英訳すると英語にのりすぎてその特徴が見失われがちであることからも窺われるだろう。ちょうど日本国憲法のバタ臭さが嫌われてきたように抵抗を喚起する大江の日本語がフェティッシュ化された純粋な日本語――例えば、国際化を先取りしていた川端康成のノーベル賞受賞演説「美しい日本の私」に採用されたようなことば――と対決するところに、彼の神話作成作業の重要な特徴がある。

ロラン・バルトは左翼神話を非本質的かつ貧困なものとみなした。というのも、左翼の自己定義は必ず「プロレタリアートであろうと植民地住民であろうと、抑圧されたもの」との関係に基づいてなされ、抑圧されたものの言葉は、

肉屋のそれと同じように、現実的である……その言葉は、ほとんど嘘をつくことを知らない……この本質的な貧困さは数少ない、痩せた神話を作り出す……〔この神話は〕真の意味を物事から追放することができず、またそれらに擬似的自然を無邪気に受け入れられる空の形態を与えるゆとりももたない。ある意味で左翼神話は常に人為的な神話、再構成された神話、といえるだろう。そこにその不器用さが由来している。

ここには左翼の無垢を信じるバルトの甘さのみならず、抑圧された人間が自己表現し、さらに左翼のメタ言語を創造することまで可能であるという錯覚が窺えるのだが、右翼と左翼の神話作成に当たっての異なる素質を鋭く洞察してくれている。図式的にいってしまえば、革新思想はその普遍化、抽象化された願望が神話転換を困難にしている。「神、母性、アップル・パイ」と「自由、平等、博愛」を比べてみよう。前者では人間から遠く離れた神の存在が身近な母性に受け継がれ、そしてそれを濃縮したような素朴ながらも満足感を与えるアップル・パイに収斂されている。これには解放を求める普遍的熱望は適うはずがない。伝統的神話とは特定の共同体のアイデンティティーを維持するのに働くのであって、その成員にとってその神話が絶対的であるからこそ普遍的に思えるのである。そもそも神話がなぜ絶対的説得力を発揮するかというと、それは（擬似的にせよ）自然の力を動員しているからである。その自然とは抽象性を絶対臭わせない、五感で確かめられるこの土地、この山、そしてこの川である。このという価値移入は、日常的近親性を帯びた場所が一回きりの事件の語り、つまり貴種＝外来王の渡来の語りに取り上げられることでなされる。その語り（神話）がただの土地、山、川であったものを意味深いこの土地、この山、この川に転換させる。さらにこの魔法的作用の感染区域の住民はその語りによって他の人間から自らを絶対区別できるアイデンティティーを供給されるのである。ところが、またバトルに戻ると、プチ・ブルジョアとなると他者を創造することすらできないのである。

彼〔プチ・ブルジョア〕は他者と直面すると、見て見ぬふりをするか、相手を黙殺して否定するか、さもなければ他者を自分に変身させてしまう……とき

たま――滅多にないことだが――〈他者〉が還元不可能なものとして顕示される。それは突発的な疑念の発動によるのではなく、常識が反逆するからだ。あれは白でなく黒い肌で、これはペルノー〔フランス性リキュウル―訳注〕でなく梨のジュースを飲む。どうしたら黒人やロシア人を同化することができようか。そこで登場する応急措置がエギゾチシズムである。

では、大江の神話作成はどこまでバルトが否定的にとらえた神話作業を反転し得ているか。そしてそこで異質(タンシャ)要素はどう働いているのであろうか。(大和)国家神話に始まる日本文学史を背負う現代作家大江健三郎の神話探求は始源的エネルギーを反神話的作業に導入することによって有意義になりうる。であるからこそ、彼は一方、アイデンティティーを作り出すべき神話を差異を作り出す契機として展開させ、他方神話自体を差異化している。つまり、方法としての神話による差異化と主題としての神話の差異化である。

芥川賞受賞作『飼育』は周知のごとく少年の〈僕〉と戦時中〈僕〉の村に墜落した米軍黒人飛行士の関係を物語っている。再読して先ず気が付くのはこの初期の作品でさえどれほど己れと他を複雑に設定しているかということである。そもそも村が非日本的である。稲作の気配は一向になく、そのかわりに果樹や敷石、〈僕〉の父親が捕まえてくる鼬などが背景となっている。黒人飛行士が空から(!)現れる前には潜在的であった非日本性がその事件に触発されて実体化する。しかしこの実体化によって単なる日本・非日本という構造が現前するのではむろんない。米軍黒人飛行士に対する日本人はもともと一体をなしていなかったのである。〈僕〉にそくしていえばその想像力の限界あたりに県庁があり、つぎにそれよりはかなり近くではありながら引き続き外部を意味する《町》(大江の括弧・名辞に固執している典型的な例)があり、そして村があるのである。村は〈僕〉の父親を含む大人、他の子供達、そしてその一員でありながら〈僕〉と〈僕〉の弟とより密な関係をむすんでいる兎口という少年によって編成されている。ちょうど兎口が他の子供達と〈僕〉と弟をつないでいるように、村と《町》の間を行ったり来たりする書記がいる。彼は勿論大人であるが村の子供達の遊びに加わることもあり、義肢を付けて

いて、その義肢を黒人兵に修理してもらったり、そのお返しに自家製の煙草をやったり、またパイプを受け取ったり、真に媒介者らしい人物である。この中であらゆる集団（《町》、村、大人、子供）から外れた、希薄な存在であるが故に小説の主人公たりうるのがいうまでもなく〈僕〉である。

黒人兵が突然現われて、〈僕〉の家の地下倉におかれることによりさまざまな遠近関係（諸人物の集団の比喩的な〈日本〉性または〈大人〉性の度合いとも言い換えられる）が変化し始める。外れ者であった〈僕〉は、黒人兵との特権的関係から一挙に中心的な存在になる。ここで築かれる連帯はまさに伝統的神話のパターンを採用しているようだ。降臨してきた神がその自然にしっかり根ざした特性により新しい共同体の成立を促進するのであるから。しかしその神の優越性を保証する自然の質が一寸変わっている。例えば、子供達は〈僕〉と弟から奇妙な任務を期待して競いあう。

黒人兵の〈樽〉を……共同堆肥場までの炎天の下を、悪臭になやまされて運ぶ作業は、僕らが尊大に指名した子供らに委ねていた。指名された子供らは喜びに頬を輝かせ、樽をまっすぐに支えて、彼らにとって貴重に思える黄濁した液体を一滴もこぼさないように注意しながら運んで行くのであった。

子供達と黒人兵が共有する原始的としかいえない自然との近親感が大江独特の贅沢な描写により始原的なものへと変換されていく。だから夏も盛りになって、子供達が村の共同水汲み場の泉で黒人兵が「堂どうとして英雄的で壮大な信じられないほど美しいセクス」の持ち主であることを発見するのはごく自然な成り行きである。そして我々読者を引き込まずにはいられない神話の頂点は、兎口が引っ張って連れてきた牝山羊に黒人兵が挑みかかるのを見た後で、皆が笑う不穏で魅惑的なくだりである。

そのあげく疲れきって倒れた僕らの柔らかい頭に哀しみがしのびこむほどだった。僕らは黒人兵をたぐいまれなすばらしい家畜、天才的な動物だと考えるのだった。僕らがいかに黒人兵を愛していたか、あの遠く輝かしい夏の午後の水に濡れて重い皮膚の上にきらめく陽、敷石の濃い影、子供たちや黒人兵の

臭い、喜びに嗄れた声、それらすべての充満と律動を、僕はどう伝えればいい？

県庁から敵の黒人兵の身柄処分に関する指示を待つ大人たち、そしてそれが永遠にこないことを祈る子供達双方にとって、時は静止している。この密閉された村の夏は古典的ともいえる神話空間を成している。

しかし、一つ気になるのは黒人兵の描き方が先程バルトのいう意味でのエキゾチックなものではないということである。たしかに原始的な要素を色濃くだしている描写は、黒人の学生と一緒に講読する際、私をデリケートにさせる。従来マイナスにとられてきたものが評価されても、否、英雄視されたとしても定形化（ステレオタイプ）された描写が今は嫌がられる時代である。超越性を狙う神話が実在的、現在的背景におかれた際このような違和感を呼び起こしても決して不思議ではない。しかし、もう一歩突き進んで考えるなら、この気になる描写はアメリカ対日本や黒人の立場というような実際的問題とはまた別の次元の問題を提起してくれているのではないか。神話はとかく差別を主要要素とすることは発見・征服のパターンでみたが、その差別が発見・征服する方にも適用されるのではないか。もしかすると、飼われながら祭られる黒人兵は何か支配の本質的姿を示しているのではないか。異人の両義性は同時に権力の両義性でもあろう。

子供達の間で、黒人兵を動物王（ストレンジャー・キング）として設けることによって、〈僕〉は〝反〟県庁・町・大人（彼の視点からは〈大人〉としても〈日本〉としても総括し得ると思うが）的共同体の指導者になるのだが、恐れていた《町》を通して県庁からの黒人兵引き渡し命令がくると、それが呼び起こす騒ぎで黒人兵は特異な座から失脚し、結果的には大人側に回って死んでしまい、〈僕〉は大人でもないが子供でもない淋しい境地に到達してしまう。

3

『飼育』のほぼ三十年後に発表された『懐かしい年への手紙』からは文字どおりのよそものはほとんど姿を消し、異人性は土着（ネイティヴ）である主要人物や彼らの出身地に担われている。それは例えば抜きんでた（超人的な！）英語能力や文学作品、殊に『神曲』に対する執着に現われたり、またそれとは異なる土地の諸要素に表現されている。その土地というのは大江健三郎に酷似するというよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com